

## 喫煙行動の形成・変容過程に関する考察

多々納, 秀雄  
九州大学健康科学センター

徳永, 幹雄  
九州大学健康科学センター

橋本, 公雄  
福岡工業大学

<https://doi.org/10.15017/438>

---

出版情報：健康科学. 7, pp.11-28, 1985-03. 九州大学健康科学センター  
バージョン：  
権利関係：



## 喫煙行動の形成・変容過程に関する考察

多々納 秀雄\*, 徳永 幹雄\*, 橋本 公雄\*\*

### A Study on the Relationships between Smoking Behavior and Social Psychological Variables.

Hideo TATANO\*, Mikio TOKUNAGA\* and Kimio HASKIMOTO\*\*

This paper reports on the relationships between smoking behavior and social psychological variables in order to refine the changing process of smoking behavior. The surveys, which were conducted three times in the same contents, were distributed to male students of university in 1980, 1981. Data collection included the behavior and consciousness of smoking, social demographic variables, personality, beliefs, attitudes, significant others and leisure activities. The data were mainly analyzed by Hayashi's quantification theory, factor analysis and multiple regression analysis. Some results were summarized as follows:

1. The considerable proportion of students had smoking habit, and their beginning time were fairly early. On the other hand, the greater part of them had negative and passive beliefs about smoking. This means the inconsistency between behavior and consciousness in smoking.

2. Partial correlation coefficients with smoking behavior were high in the degree of satisfaction in life, smoking behavior of their good friends and consciousness on smoking.

3. Although personality which was consisted of four factors; affective, adaptive, active and willful, had not so strong relations with smoking behavior, significant strong relations were revealed in affective and adaptive factors, and non-smokers were high in willful factor.

4. Non-smokers had better conditions and higher consciousness on health than smokers, but the differences were not significant.

5. On the cognitive beliefs about smoking, which was consisted of three factors; affective, social and somatic, the most remarkable difference was observed in affective factor. Similarly, there was significant difference in emotional and expressive attitudes on smoking. Students who began smoking after the entrance into university had similarities with smokers in affective beliefs and emotional attitudes prior to smoking.

6. While smokers had strong orientations to commercial leisure activities, non-smokers had orientations to cultural and sportive actions.

7. Family had not so strong influences on smoking behavior, but their friends had remarkable influences. On the other hand, the normative beliefs, the advices of prohibition in smoking from others, were reversed.

8. Multiple regression analysis of the aboved social psychological variables revealed

---

\* Institute of Health Science, Kyushu University 11, Kasuga 816, Japan.

\*\* Fukuoka Institute of Technology, Shimowajiro, Fukuoka 811-02, Japan.

strong relationships between smoking behavior, attitudes on smoking and significant others.  
(Journal of Health Science, Kyushu University, 7:11~28,1985)

## 諸 言

「なぜ人間は口から煙を吸いこんで鼻から吐き出すのであるか、腹の足しにも血の道の葉にもならないものを」とは、漱石の『吾輩は猫である』の猫の疑問であるが、その答えは当の人間にも実はよくわかっていない。

喫煙が健康に有害であることは否定できないことであり、嫌煙運動が社会的に拡大していることも周知の通りである。しかしながら一方において、特に未成年者や女性の間ではむしろ喫煙者が増加する傾向にあることも確かである<sup>10)11)</sup>。なぜ人間が喫煙するのか、に関してこれまで多くの研究が試みられているが、それらの多くはニコチンの生理的・薬理学的効果などをはじめ、ともすれば医学的視点からの研究が多く、喫煙行動を社会行動の一形態として捉えた社会科学的視点からの研究は必ずしも多くはない。前記のように未成年者や女性において喫煙が増大していることは、健康問題とは別に、喫煙が社会的あるいは心理的なシンボリックな意味作用を果たしていることを示唆するものと思われるが、これらのことは喫煙問題に関する社会科学研究の必要性と可能性を同時に示唆するものでもあろう。

しかしながら、喫煙行動に関する従来の研究においては、Melittin, C.<sup>10)</sup>や後藤<sup>7)</sup>などが指摘するように、喫煙行動に関与する社会的・心理的諸変数を体系的に分析した研究は非常に少なく、また喫煙行動の形成・変容過程を継続的に追跡した研究は皆無に近い。

そこで本研究は、喫煙行動を社会的行動の一形態として位置づけ、喫煙者而非喫煙者間の社会的属性の差異を比較すると共に、喫煙行動の形成・変容過程に関与する社会的・心理的諸変数について分析を試みることにし、今後の喫煙防止教育のための方策を考える手掛りを得ると共に、喫煙問題を含む健康問題に関する社会科学研究の必要性と可能性について考えてみたい。

表1 対象者数の内訳

回答者	調査時期			計
	1回目	2回目	3回目	
A群(3回の回答者)	119	119	119	119
B群(2回の回答者)	99	99	—	99
C群(1回の回答者)	—	—	99	99
計	218	218	218	317

(注) C群は集計から除外した。

## 方 法

### 1. 調査の概要

既に述べられたように、本研究は喫煙行動の実態とその形成・変容過程の分析を目的とするものであるが、付表1に示される調査項目に基づき、福岡市内の国立および私立の男子大学生を対象に、ほぼ同一の調査を3回にわたり実施した。つまり、大学入学時、夏休み明け、入学1年後という区分により、昭和55年4月、同9月、56年4月、同一対象に対して、講義の時間を利用し調査票を配布し回収した。調査票への回答が不備である者、及び第1回目または第2回目の調査に回答しなかった者などを除く、有効回答者の内訳は表1に示される通りである。

### 2. 調査結果の分析

得られた資料について、特に心理的諸要因のパターン分析のために因子分析を適用し、一方要因分析のために数量化理論第Ⅱ類と重回帰分析を適用した。分析のために取り上げられた項目や変数の詳細は付表1に示される通りである。なお、喫煙行動の実態に関する分析の一部は、表1に示されるB群(つまり3回目調査の非回答者)をも資料として組み入れたが、その他については断らないかぎりA群(つまり3回の調査について有効回答した対象者)に関する結果のみである。同様に表1のC群(3回目調査のみの回答者)は

すべて集計から除外した。

## 結果と考察

### 1. 喫煙行動と喫煙意識の実態

喫煙行動の実態についての報告は非常に多く、例えば一般成人を対象とする専売公社<sup>10</sup>の調査によると、喫煙率は男子では漸減傾向にあるのに対し女子では漸増傾向にあること、また最高の喫煙率を示すのは20代などの若い世代であるが、近年これらの若い世代ほど“タバコ離れ”が顕著であること、等々が報告されている。一方、未成年者の喫煙に関する調査報告も福田・三宅<sup>4)5)6)</sup>、渡辺ら<sup>13)</sup>などをはじめ非常に多く、喫煙の開始時期が低年齢化していること、あるいは初期の喫煙行動が成長後の行動と密接に関連していること、等々が一般に指摘されている。

本研究でもそれらの先行研究を基礎としながら、喫煙行動に関する若干の実態について調査した。結果は表2に示される通りであるが、本研究の目的が実態の調査ではなく、対象者数も著しく限定されているため、以下、実態に関する多少の結果を指摘するだけにとどめたい。

表2にみられるように、喫煙者は大学入学時には余り多くはないが、以後、急激に喫煙率が上昇し、1年後には約半数の者が喫煙を行なっている。非喫煙者において、非喫煙の理由としては「好きではない」と「体によくない」が各々4割以上を占め主要な理由となり、また非喫煙者の大半は喫煙を「ばからしい」と思っている。なお、表2では示されていないが、非喫煙の理由として「体に良くない」とする者は「好きではない」とする者よりも喫煙に移行した者が多く、同様の傾向は喫煙者への態度において「ばからしい」とする者より「うらやましい」または「どちらともいえない」とする者においても認められた。

一方、喫煙者について、まず喫煙開始時期をみると、大学入学時における喫煙者の内の約半数は高校時代に喫煙を開始しているが、小学生時代とする者も多いことが注目される。そのような喫煙開始の契機（動機）としては、第1回目および第2回目の調査ともに「なんとなく」が多いが、前者つまり高校以前開始者では次いで「他者からの勧誘」や「他者の喫煙への興味」などが多いのに対し、後者つまり大学入学後開始者では「ストレス解消」が多く、その結果は対照的である。現在の喫煙本数と喫煙理由は表2—⑥⑦に示される通りであるが、継続的喫煙者ほど喫煙本数が次第に多く

なっている。これらの結果は、大学生を対象とした渡辺ら<sup>12)</sup>の調査結果とほぼ一致する。

最後に、喫煙行動の意識に関連するものとして、喫煙の有害意識と行動意図（喫煙希望）とをみると、表2—⑧⑨に示されるように、約7～8割の者が喫煙を有害であると認識し、また喫煙を希望する者は2割以下であり、従って喫煙行動はかなり否定的に認識されていると考えられる。しかし一方において、そのような有害意識が継続的に減少していること、そして喫煙群においても有害と考えている者がかなり多いこと、等々にも注意すべきであろう。つまり、喫煙を有害とみなし、喫煙したくないと思いつつも、喫煙継続者が多いことは、後藤<sup>7)</sup>が指摘するように、喫煙行動が単なる生理的レベルを超えた社会心理的レベルにかかわる、選好的態度の次元の問題と考えられるべきものであることを示唆するものといえよう。

### 2. 喫煙行動と基礎的・社会的変数の関連

喫煙行動と基礎的・社会的変数の関連をみた研究はあまり多くはないが、他の研究によると喫煙者と非喫煙者の属性の間にはいくつかの点で差異が認められ、例えば、兄弟数が少ない者、出生順位の長子、親が喫煙している者、ブルーカラー、スポーツ非実施者、あるいは女性では社会的地位の高い者、等々において各々喫煙傾向が強いことが報告されている<sup>1)8)9)13)</sup>。

本研究では、大学2年次（第3回目調査）の喫煙状況と若干の基礎的・社会的変数の関係をみるために、第1回目調査では12変数、第2回目と第3回目調査では各々7変数をそれぞれ取り上げ、その全体的傾向をまず検討した。結果は表3、付表2に示される通りであるが、諸変数の関連は全般的に必ずしも強くはなく、下記の諸変数でやや高い関連度が見られたにすぎない。

- ・第1回目調査……職業、入学目的、出身地
- ・第2回目調査……友人の喫煙、アルバイト、スポーツ実施度
- ・第3回目調査……スポーツ実施度、友人の喫煙

これらの結果から基礎的・社会的変数と喫煙行動の関係について、一般的なパターンを指摘することは困難であるが、個々の変数のカテゴリーの結果から次のような傾向性が示唆される。

第1に、喫煙者は非喫煙者に比べ、大都市よりも農山村や地方都市に出生した者が多く、出生順位が早く、兄弟数は少なく、そして概して両親の学歴は低い傾向にある。

表2 喫煙の行動と意識の実態

対象群	変数 調査期	① 喫煙の有無				② 非喫煙の理由			③ 非喫煙者の観			④ 喫煙開始時期				⑤ 喫煙動機				
		非喫煙	過現在 去非喫煙	時々喫煙	毎日喫煙	好き きで はい	体 な よ くい	そ の 他	う し ら や まい	ど ち ら と も い え な い	ば か ら し い	小 学 生 時 代	中 学 生 時 代	高 校 生 時 代	わ か ら な い	興 味 ・ 関 心	勧 誘	ス リ ル	ス 解 ト レ ス 消	な ん と な く
A・B群	1回目	45.0	26.6	10.6	19.9	44.2	43.6	12.2	2.0	39.9	56.2	12.7	21.2	53.4	12.7	21.0	26.6	1.0	8.6	42.8
	2回目	52.8	13.3	14.2	19.8	37.5	45.8	16.7	1.4	47.9	50.7	/				7.3	8.3	0.4	25.8	58.2
A群	1回目	64.7		35.3		45.5	41.6	13.9	5.4	43.2	51.4					20.3	26.6	1.6	6.3	45.3
	2回目	62.1		37.9		39.2	47.3	13.5	2.8	52.8	44.4					4.4	4.4	2.2	20.0	68.9
	3回目	47.9		52.1		49.1	29.8	21.1	3.8	58.5	37.7	13.3	6.7	0.0	20.0	60.0				

対象群	変数 調査期	⑥ 喫煙本数			⑦ 喫煙理由			
		1 9 本	10 19 本	20 本 以上	ス解 ト レ ス消	落 ち つ く	好 き だ か ら	な ん と な く 他
A・B群	1回目	10.9	56.5	32.6	11.7	26.7	5.0	56.7
	2回目	44.3	37.7	18.0	6.7	41.4	15.7	41.4
A群	1回目	41.5	36.6	21.0	10.5	23.7	5.3	65.8
	2回目	42.2	31.1	26.7	6.7	33.3	15.6	44.4
	3回目	16.7	36.7	46.7	43.5	16.1	8.1	32.3

対象	変数 調査期	⑧ 喫煙有害意識				⑨ 喫煙希望			
		非 常 に 有 害	か な り 有 害	や や 有 害	ど え な い ・ 無 害	し た い	ど い え な い も い	し な た く い	
A群	1回目	47.1	30.3	18.5	4.2	16.0	26.9	57.1	
	2回目	40.3	31.1	22.7	5.9	20.2	26.1	53.8	
	3回目	39.5	31.1	17.6	11.8	18.4	25.2	56.3	
喫煙行動	喫煙	1回目	30.0	38.3	30.0	1.7	21.7	38.3	40.0
		2回目	30.0	33.3	33.3	3.3	31.7	30.0	38.3
		3回目	26.7	43.3	20.0	10.0	34.9	33.3	31.7
	非喫煙	1回目	63.8	22.4	6.9	6.9	10.3	15.5	74.1
		2回目	51.7	27.6	12.1	8.6	8.6	22.4	69.0
		3回目	51.7	19.0	15.5	13.8	1.7	17.2	81.1

(注) A・B群の内容は表1参照。また喫煙行動の区分は第3回目調査の喫煙状況による。

表3 喫煙行動と基礎的・社会的変数の関連

調査	変数	$x^2$	クramer係数	調査	変数	$x^2$	クramer係数
1 回 目 調 査	現役・浪人	0.03	0.12	2 回 目 調 査	友人数	3.91	0.18
	出身地	8.77	0.26		友人の喫煙状況	15.04*	0.33
	兄弟数	3.84	0.18		住居	1.36	0.11
	出生順位	2.60	0.15		アルバイト	7.21	0.24
	父の学歴	2.37	0.10		生活満足度	0.99	0.09
	母の学歴	2.45	0.14		スポーツ実施度	6.36	0.23
	3 回 目 調 査	家の職業	11.70	0.30	サークル所属	3.55	0.17
		生活程度	6.38	0.23	友人数	5.74	0.21
		入学目的	11.00	0.29	友人の喫煙状況	6.71	0.23
		生活満足度	7.24	0.17	住居	0.89	0.09
		余暇観	3.51	0.17	アルバイト	2.13	0.13
		スポーツ実施度	1.12	0.12	生活満足度	5.50*	0.21
	サークル所属	2.66	0.15	スポーツ実施度	9.62	0.27	

\*  $p < .05$ 

第2に、大学入学後において喫煙している友人はもとより一般の友人も多く、アルバイトは時々行なう程度であるが、概して生活への満足度は低い。

第3に、喫煙者ほどクラブ・サークルに所属する者が多いが、スポーツ系クラブ所属者の喫煙率は文化系のそれを当初は上回るのに対し、次第にその比率は逆転してくる。

これらの結果を踏まえながら、次に第1回目の調査項目（但し、後述される社会心理的変数は除く）と第1回目（入学時）および第3回目（2年次）調査における喫煙状況の関係を、数量化理論第Ⅱ類の適用により分析し、諸変数の規定力をみたものが図1である。

まず第1回目調査における喫煙状況に対する諸変数の偏相関をみると、強い規定力は喫煙の行動意図、親友の喫煙状況、現役・浪人などにみられ、概して過去の諸変数より現在の諸変数において強い規定力が認められた。

次に第3回目調査における喫煙状況に対する諸変数の偏相関をみると、強い規定力は喫煙有害意識、生活満足度、兄・姉や親友の喫煙状況などにみられる。第1回目調査と第3回目調査の結果は必ずしも一致して

いないが、2つの調査で共に高い偏相関を示す要因としては親友の喫煙状況、生活満足度、喫煙有害意識、あるいは現役・浪人などの変数があげられ、それらの変数のカテゴリー・スコアをみると、親友が喫煙している者、生活満足度の低い者、喫煙有害意識の低い者、あるいは浪人した者、等々がいずれも喫煙の方向に強く寄与している。なお、サンプル数が少ないため、個々のカテゴリー・スコア別の比較については割愛したい。

以上、喫煙行動と基礎的・社会的変数の関連をみたが、必ずしも明瞭な関連は認められず、それらの間の一般的傾向を見出すには至らなかったが、基本的には前述された諸研究の結果とほぼ同一の結果が得られたものと考えられる。

### 3. 喫煙行動と社会心理的変数の関連

#### (1) 性格と喫煙

Matarazzo, J.D.<sup>9)</sup>が指摘するように、喫煙者と非喫煙者との間にいくつかの点において性格の差異を認める研究報告が多い。これに関連して、禁煙の成功者と不成功者との間にも同様な差異があることも報告され

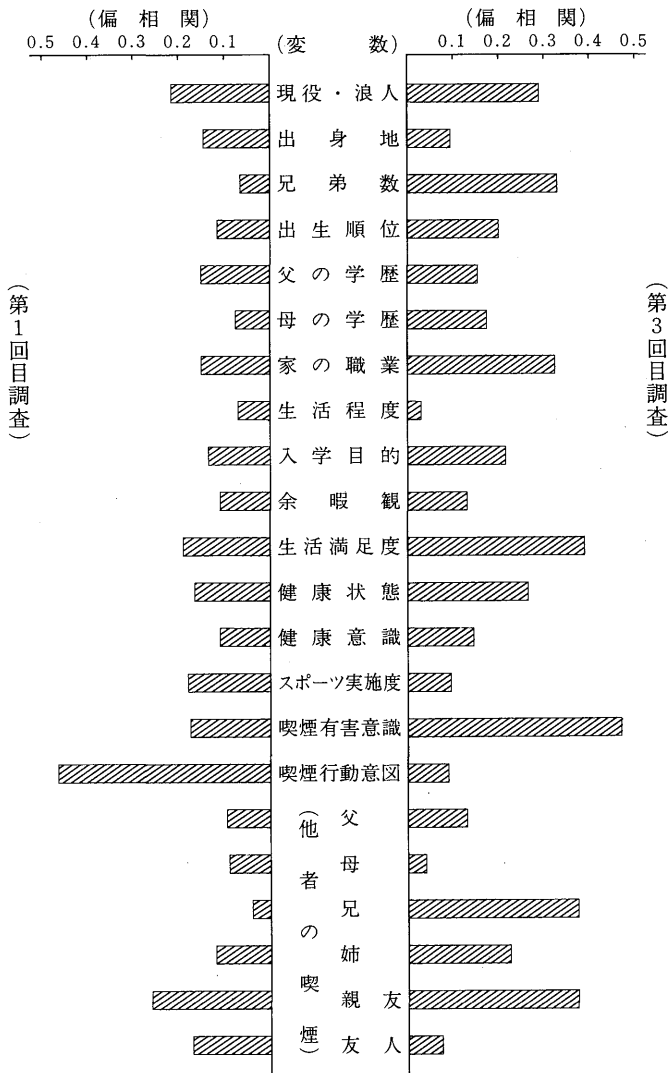


図1 喫煙行動に対する基礎的変数の規定力

ている<sup>13)7)</sup>。

性格と喫煙行動の関係の分析のために、性格に関する16項目について4段階の評価尺度法で測定し、得られた結果について因子分析(主因子解, ノーマルバリマックス回転)を試みた。

因子分析の結果, 付表3にみられる4個の因子が抽出され, 全分散の53.4%が説明された。各因子の解釈については割愛するが, 各項目の負荷量の結果から, ここでは第1因子を「適応性」因子, 第2因子を「情緒性」因子, 第3因子を「活動性」因子, そして第4

因子を「意志性」因子と命名したい。

因子分析の結果を基礎として各因子についてそれぞれ3項目ずつを選び, 4段階の尺度に4~1点を与えることにより因子別の得点を算出し, 回帰分析を試みることによって喫煙行動との関係をみた。なお, ここでの喫煙行動とは3回にわたる調査への回答に基づくものであり, それは「1. 第1回目調査の段階から3回目まで常に喫煙していた者」(以下, 喫煙継続群と呼ぶ), 「2. 第1回目調査では喫煙していなかったが以後喫煙を開始した者」(喫煙移行群と呼ぶ), そして

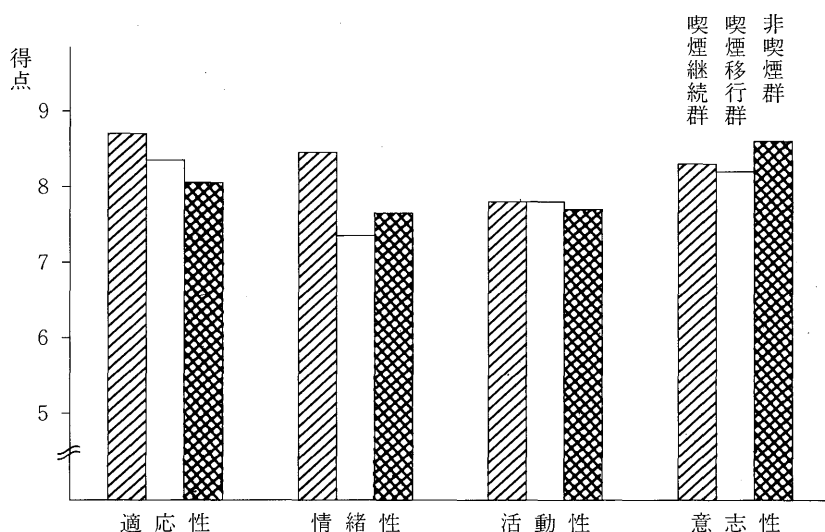


図2 性格と喫煙行動の関連

「3. 第3回目調査において非喫煙の者」(非喫煙群と呼ぶ)に区分される。

このように区分された喫煙行動と性格に関する諸因子の関係を、付表4、図2に示されるF値によって関連性をみると、いずれの因子においても有意性は認められなかったが、相対的には情緒性因子と適応性因子においてかなり強い差異がみられた。つまり、性格全体としては喫煙継続者が他の喫煙移行群や非喫煙群に比べ各因子に対して積極的・肯定的反応傾向を示したが、特にそれは情緒性と適応性の各因子において顕著であり、一方活動性因子ではほとんど差異は認められず、また意志性因子では逆に非喫煙群の方が高い値を示した。これに関連して喫煙移行群は情緒性と意志性の因子において他の群よりも低いことは、喫煙行動の形成に関する1つの示唆を与えるものといえよう。

## (2) 健康と喫煙

喫煙が健康に悪影響を及ぼすものであることはしばしば喧伝されている通りである。健康状態および健康意識と各調査時点における喫煙行動および喫煙率の関係についてみたものが付表5、図3である。

喫煙群と非喫煙群(これは各調査時期において喫煙しているか否かによる区分である)共に、「健康状態が悪い」とする者が極めて少数であったために、両群の間に有意差は認められなかったが、全体的傾向としては何れの調査時期においても喫煙群に比べ非喫煙群の

方が健康状態において良好であると回答する傾向にあり、同様に健康状態が「良い」とする者より、「悪い」とする者において喫煙率は高い傾向にあることが示唆された。

同様に、「健康は重要であるか否か」についての健康意識においても、両群共に「非常に重要」あるいは「かなり重要」とする者の比率が極めて多いが、両群の間には第1回目と第3回目の調査において5%水準の有意差が認められ、いずれの時期においても喫煙群に比べ非喫煙群の健康意識が高い傾向にあった。そしてまた付表5に示されるように、健康意識の差異によって喫煙率に極めて大きな違いが認められた。

なお、上記のように健康状態と健康意識に応じて喫煙行動がかなり異なるとはいえ、健康の重要性を認識しているにもかかわらず喫煙している者が多いことにも注意すべきであり、このことは喫煙行動の考察においては健康以外の他の要因が重要であることを示唆するものといえよう。

## (3) 喫煙の信念

ここでの信念(Belief)とは、喫煙行動が個人あるいは社会に及ぼす結果(効果)に関する個人の評価であり<sup>2)</sup>、その信念に関する項目は付表6に示される15項目に対する4段階の評価尺度法で測定された。それらに関する因子分析(主因子解、ノーマルバリマックス回転)の結果、付表6にみられるように3個の因子が



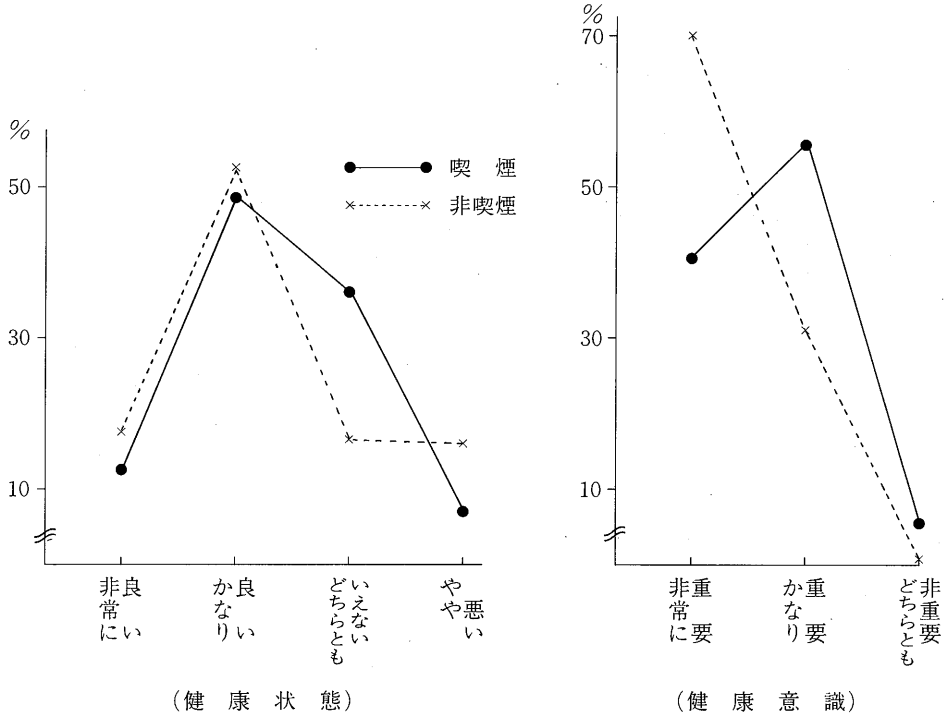


図3 健康と喫煙行動のカテゴリー別比較 (1回目調査)

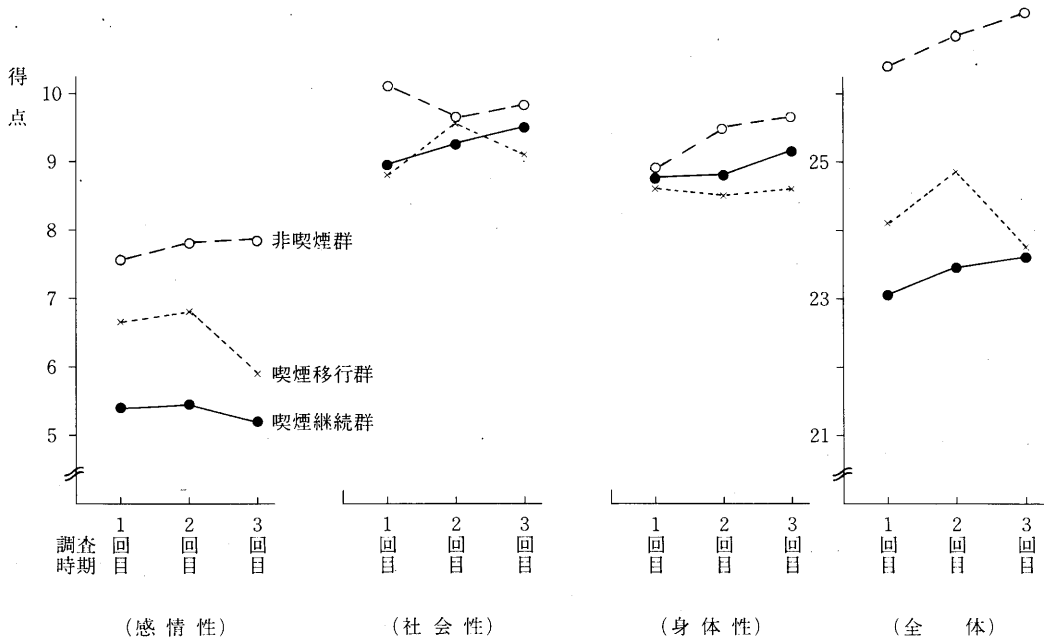


図4 喫煙行動と信念の関連

抽出され、全分散の62.4%が説明された。

抽出された3つの因子の解釈については割愛するが、ここでは第1因子を「感情性」因子、第2因子を「社会性」因子そして第3因子を「身体性」因子と命名したい。

各因子から因子負荷量の高い項目を各々3項目ずつ選び、それらの4段階の評価尺度に各々4点から1点までの得点を与え、各因子別の合計点と喫煙行動（つまり、前記の喫煙継続群・喫煙移行群・非喫煙群の分類）との関係をみたしたものが、図4である。

構成された3因子と喫煙行動に関する回帰分析の結果、F値によりその有意性をみると、社会性因子では1回目調査のみで1%水準の有意差がみられるにすぎず、概して喫煙行動に差異は認められなかったが、感情性因子では各調査時期のすべてに1%水準の有意差が認められると共に、身体性因子においても3回目調査で1%水準そして1回目調査で5%水準の各々有意差がみられるなど、それらの因子における差異は極めて顕著であり、そして3つの因子の何れにおいても喫煙者に比べ非喫煙者は喫煙の結果（効果）について否定的信念をもっていることが示唆された。

前記のように、最も顕著な差異は感情性因子において認められたが、図4に示されるように、感情性因子の得点は喫煙行動の差異に応じて継続的に極めて対照的な傾向を示し、非喫煙群は次第に信念得点が増加する（つまり否定的信念となる）のに対し、喫煙移行群と喫煙継続群では逆にそれが減少する傾向にあり、特にそれは喫煙移行群において極めて顕著である。社会性因子と身体性因子における信念得点の変化は感情性因子ほど著しくないが、身体性因子においては各群ともに得点が増加する傾向にあるとはいえ喫煙継続群と喫煙移行群のそれは大きくなく、非喫煙群との差異は継続的に拡大する傾向がみられる。

なお、喫煙移行群の信念得点の変化は多くの点で注目すべき傾向を示しているが、特に喫煙開始以前から信念得点为非喫煙群に比べて低いこと、また継続的低下の第1の理由は感情性因子における得点の低下にあること、等々は喫煙防止の方策を考える上で1つの資料を提供するものであると考えられる。

#### (4) 喫煙へのイメージ・態度

前記の信念が喫煙に関する認知的側面に関わるのに対し、喫煙に関する情緒的・表出的なイメージすなわち態度をみるために、“今後喫煙することは”という行動に対する反応を「不快—愉快」などの7つの形容詞の対を抽出し、各々を4段階の評価尺度で測定し、喫煙行動（つまり喫煙継続群・喫煙移行群・非喫煙群の分類）との関係を検討した。

図5に示されるように、3回の各調査時期のいずれにおいても1%水準の有意な差が認められたが、それは特に3回目調査において顕著である。つまり、喫煙に関するイメージ・態度の差は継続的に拡大する傾向がみられる。またいずれの段階でも喫煙者に比べ非喫煙者は喫煙に対して非好意的イメージを持っているが、なかでも喫煙移行群は既に喫煙開始以前から非喫煙群に比べ好意的イメージを持っており、その程度は喫煙に伴って上昇し、喫煙継続群と一致するに至っている。

これらの結果は、前記の喫煙に関する信念においても感情性因子で最も著しい差異が認められたことと同

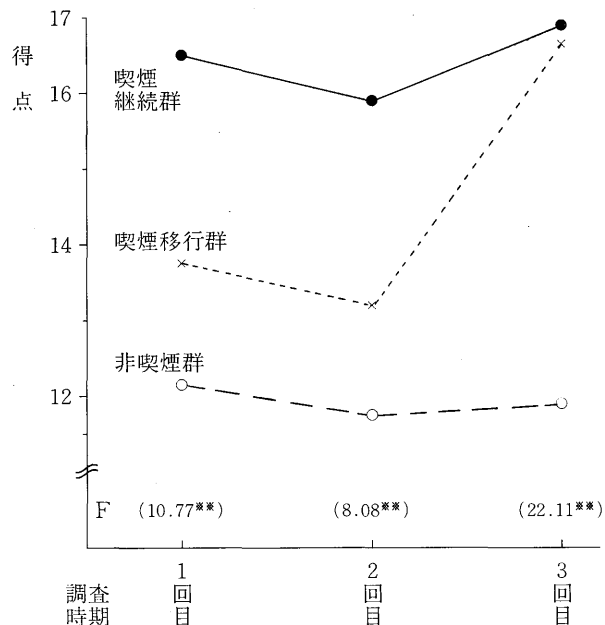


図5 喫煙に対するイメージ(態度)の変化

様に、喫煙に対する情緒的・感情的・表出的な意識が喫煙行動の差異を規定する最も重要な要因であることを示唆するものといえよう。

(5) 娯楽と喫煙

喫煙行動がどのような契機によって形成されるか、あるいは喫煙者はどのような価値観・志向を持っているのか、等々を考えるための1つの側面として、次に喫煙と娯楽との関係のみてみたい。娯楽活動あるいは娯楽意識をみるために、マージャン・パチンコなどの8種類の活動をあげ、1回目調査では実施の希望を、そして2・3回目調査では実施の程

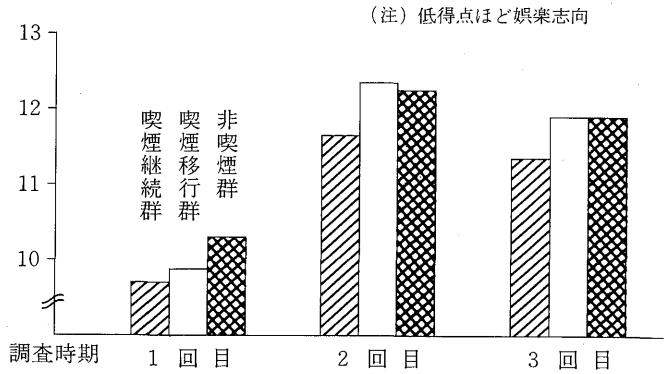


図6 娯楽度と喫煙行動の変化

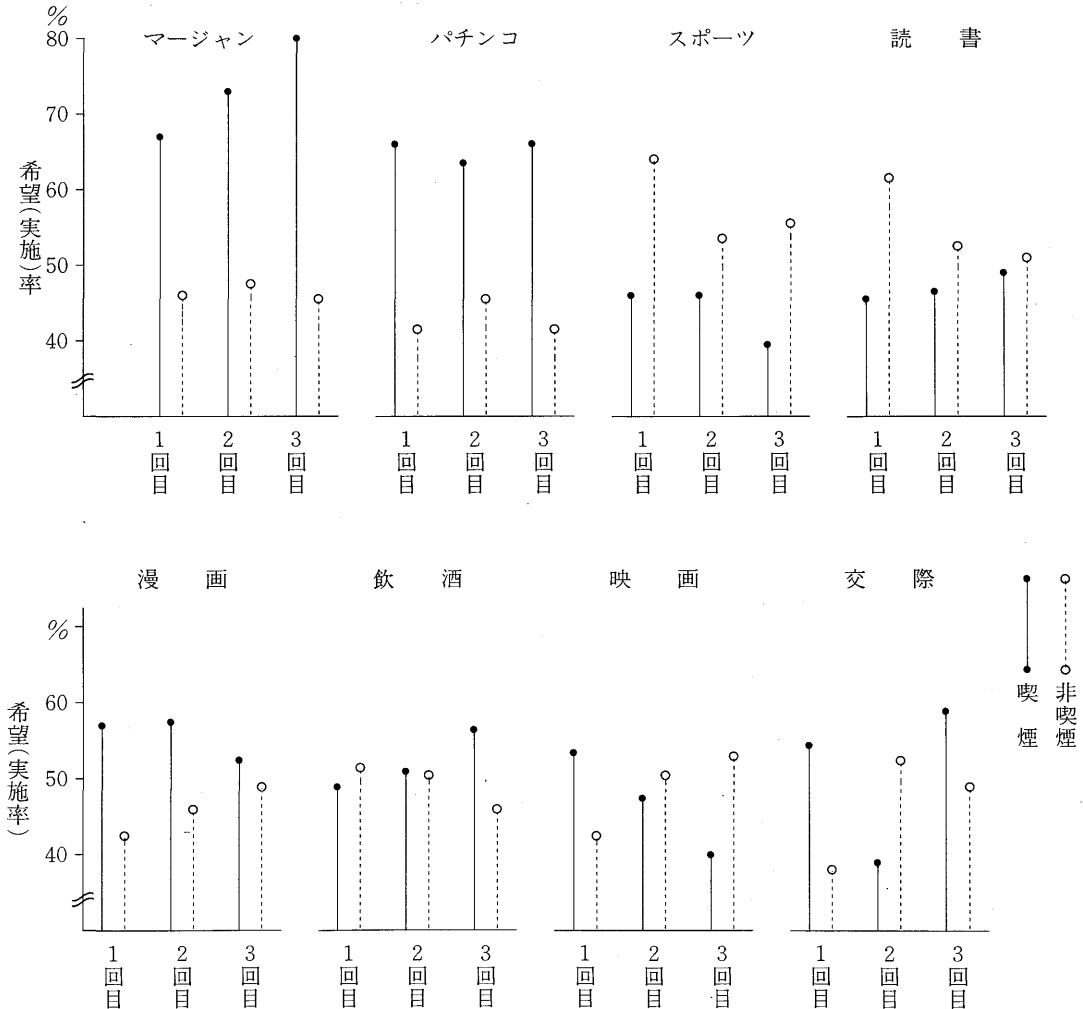


図7 娯乐的・文化的活動と喫煙行動の差異

度を、それぞれ4段階尺度でたずねた。

まず喫煙者の娯楽度つまり娯楽志向性をみるために、4段階尺度に1～4点の得点を与え、8種類の活動の合計得点と喫煙行動の関係をみたものが図6である。それによると喫煙継続群と他の2つの群との差異

は当初からかなり著しく、全体としては喫煙者ほど娯楽志向であり、更にそれは継時的に顕著になっている。

一方、第3回目調査における喫煙の有無を基準として、各時期の娯楽活動の希望(実施)度をみたものが図7である。有意な差は1回目調査ではパチンコと漫画に、3回目調査ではマージャン・パチンコ・映画に認められ、喫煙者に顕著な活動としてはマージャン・パチンコ、非喫煙者においてはスポーツ・読書が各々あげられ、更に喫煙者において志向が強くなる活動としてはマージャン・飲酒、非喫煙者においては漫画・映画などが指摘される。従って、既に明らかなように喫煙者ほど当初から商業的・奢侈的娯楽への志向が強くなり、その傾向は継時的に顕著となるのに対し、逆に非喫煙者は文化的活動やスポーツへの志向が強く、両者の志向の差異は極めて著しい。

表4 重要な他者と喫煙行動の関連

① 他者の合計

行動		他者の合計点	
		喫煙継続群	他者の合計点
喫煙行動	喫煙継続群		12.76
	喫煙移行群		13.96
	非喫煙群		14.38
平均得点			13.81
F値			5.42***

② 重要な他者別の喫煙行動との関連 \*\*\* p < .01

行動		他者	父			母			兄		
			毎日喫煙	時々喫煙	非喫煙	毎日喫煙	時々喫煙	非喫煙	毎日喫煙	時々喫煙	非喫煙
喫煙率			46.9	71.4	52.4	75.0	42.9	49.0	57.9	0.0	50.0
喫煙行動	喫煙		50.0	8.3	41.7	10.0	5.0	85.0	18.3	0.0	81.7
	非喫煙		56.9	3.4	39.7	3.4	6.9	89.7	13.8	3.4	82.8
$\chi^2$			2.35			2.28			2.69		
クramer係数			0.14			0.14			0.15		

行動		他者	姉			親友			一般友人		
			毎日喫煙	時々喫煙	非喫煙	毎日喫煙	時々喫煙	非喫煙	喫煙が多い	喫煙もいる	喫煙はいない
喫煙率			100.0	0.0	50.0	63.5	61.9	22.5	64.7	38.6	45.5
喫煙行動	喫煙		3.3	0.0	96.7	63.3	21.7	15.0	55.0	36.7	8.3
	非喫煙		0.0	1.7	98.3	32.8	13.8	53.4	29.3	60.3	10.3
$\chi^2$			3.03			20.72***			9.47*		
クramer係数			0.16			0.39			0.27		

\*\*\* P < .01    \* P < .05

## (6) 喫煙に対する他者の影響

福田・三宅<sup>8)</sup>は高校生の喫煙行動と家族の喫煙習慣の関係进行分析し、両者の間に極めて有意な関係が認められることを報告しているが、本研究では喫煙行動に関する「重要な他者」(Significant Others)として、両親を含む6種類の他者を選び、その喫煙状況と対象者の喫煙行動の関係を検討した。

表4に示されるように、他者の喫煙状況を得点化し、喫煙行動の類型別に比較してみると、その得点(高い得点ほど喫煙する他者が少ないことを表す)は非喫煙群、喫煙移行群、喫煙継続群の順に高く、その差は1%水準で有意である。従って、喫煙者ほど喫煙する他者が多いと考えられる。

しかしながら、個々の他者の喫煙状況を第3回目の調査の喫煙の有無および喫煙率から分析すると、父・母・兄・姉などの家族の喫煙状況との関係はそれほど顕著ではなく、有意な差異は親友および一般友人においてのみ認められる。但し、それ自体は少数であるとはいえ、母親あるいは姉が喫煙者である場合には喫煙率が非常に高いことには注意すべきであろう。

一方、上記のように親友あるいは一般友人の喫煙状況は喫煙行動や喫煙率と密接な関連を示し、一般的には喫煙者ほど喫煙する友人が多く、逆に非喫煙者は喫煙習慣のない友人と交際する傾向にあるといえよう。

重要な他者に関連して、次に、仮に喫煙した場合に重要な他者が「禁煙すべきである」と忠告すると思うか否か、つまり、Fishbeinsら<sup>9)</sup>が指摘する「規範信念」(Normative Belief)<sup>9)</sup>について触れてみると、禁

煙の忠告をすると思われる他者の比率は、母・医師・父の順に高く、友人のそれは非常に少ない。しかしながら喫煙者と非喫煙者との差は父・母・兄弟などの家族などにやや認められるとはいえ、8種類の他者すべてにおいて有意差は認められなかった。この結果から、禁煙の忠告に関して他者の影響力は極めて弱いこと、そして友人は喫煙に対しては強い影響力を持っていたのに対し、逆に禁煙に対する影響力は非常に弱いこと、等々が示唆されよう。

なお、表5—①は4段階の評価尺度を得点化し、規範信念の合計(高得点ほど忠告があるとみなすことを表す)をみたものであるが、それによると有意ではないとはいえ喫煙移行群・非喫煙群・喫煙継続群の順に高く、特に喫煙移行群が既に喫煙開始以前から規範信念において他と異なることが注目される。

## 4. 喫煙行動および社会心理的諸変数の相関関係

最後に、既に述べてきた6種類の社会心理的諸変数および大学入学時の喫煙行動(有無)における相互の関係を重回帰分析の適用により分析してみた。結果は表6に示される通りであるが、喫煙行動と高い単相関係数およびベータ係数を示す変数は喫煙に対するイメージ(態度)と重要な他者の喫煙状況であり、他の変数ではそれほど高い相関は認められず、この2つの変数によって喫煙行動のほとんどが説明されている。特に諸変数の中ではイメージ(態度)が最も高い相関を示していることは、既に述べた結果とも一致するものであり、それを裏付けるものであるが、更にそのイ

表5 規範信念(他者による禁煙の忠告)と喫煙行動の関連

## ① 規範信念の合計

喫煙行動	規範信念の合計
喫煙継続群	16.71
喫煙移行群	18.54
非喫煙群	17.24
平均	17.32
F値	0.53

## ② 重要な他者別にみた忠告の可能性

行動		他者								
		父	母	兄弟	喫煙友人	非喫煙友人	先輩	医師	教師	
喫煙行動	喫煙	43.3	60.0	28.3	16.6	30.0	11.7	50.0	35.0	
	非喫煙	39.6	56.9	37.1	15.5	32.7	22.4	46.6	36.2	
$\chi^2$		5.90	6.92	5.62	4.43	3.83	4.55	3.32	3.28	
クラマー係数		0.22	0.23	0.21	0.19	0.18	0.19	0.16	0.16	

(注) 比率は、他者からの忠告が「非常にありそう」「かなりありそう」の合計。

表6 主要な社会心理的変数と喫煙行動の相関関係

相関 変数	単 相 関 係 数							重係 相 関数	べ係 1 タ数
	喫煙行動	喫煙イメージ	他者の喫煙状況	喫煙の信念	規範信念	娯楽度	性格		
喫煙行動		.536	-.390	-.272	-.073	-.127	.078	—	—
喫煙イメージ			-.347	-.597	-.202	-.271	.019	.536	.527
他者の喫煙状況				.280	.207	.201	-.165	.578	-.248
喫煙の信念					.247	.271	.021	.584	.082
規範信念						.026	.012	.587	.062
娯楽度							-.313	.588	.060
性格								.590	.044

メージは信念および重要な他者の喫煙状況と密接に関連していることは注目される。つまり、喫煙行動の形成・変容過程に対するイメージ（態度）が最も重要な機能を果たし、そのイメージの形成と変容には信念と重要な他者が密接に関連していること、等々の結果は今後の喫煙防止のための対応や教育において重要な示唆を与えるものといえよう。以上の結果から、喫煙行動に関して図8のような関係が仮説されよう。

要 約

本研究は健康行動の形成・変容過程を考察するための1つの予備的研究として、近年話題になっている喫煙行動をとりあげ、その行動を規定し形成している社会的・心理的変数の関与について、大学生男子を対象に3回の調査を実施することにより分析を試みた。主要な結果は次のように要約される。

1. 喫煙者の比率はかなり高く、その開始時期はかなり早期であるが、全般的には喫煙に関して否定的・消極的な意識を持つ者が多い。逆にこのことは否定的意識を持ちながらも喫煙を継続したり、喫煙に移行したりする者が多いことを意味し、喫煙の形成過程の考察においては他の社会的・心理的変数の認識の重要性を示唆するものである。
2. 数量化理論第Ⅱ類により喫煙行動に関する基礎

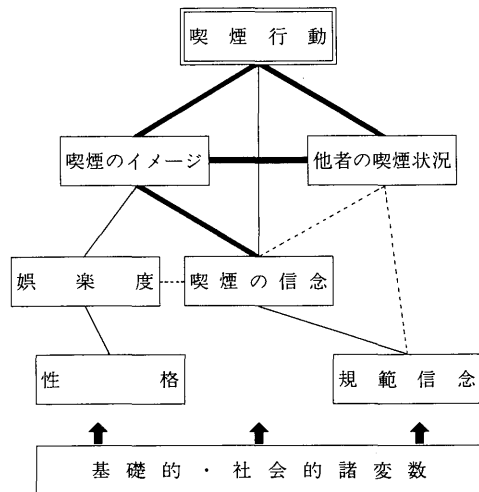


図8 喫煙行動に対する諸変数の関与モデル

的・社会的変数の規定力を分析した結果、生活満足度・親友の喫煙状況・喫煙有害意識などが高い偏相関を示した。

3. 性格との関連をみると、抽出された4因子のうち情緒性と適応性の因子で差異が認められ、情緒性と適応性は喫煙者ほど顕著であるのに対し、意志性は非喫煙者において高いことが明らかにされた。

4. 健康の状態と意識については、相対的に非喫煙者ほど健康度が高く、健康の重要性を強く認識してい

るが、その差はそれほど顕著ではなく、健康以外の要因の重要性が示唆された。

5. 喫煙を認知的にいかにかに評価するか、つまり喫煙に関する信念については、因子分析により感情性・社会性・身体性という4つの因子が抽出されたが、喫煙者と非喫煙者の間には感情性因子において最も顕著な差異が認められた。特に喫煙移行群では喫煙開始以前から信念のレベルが低く、喫煙に伴い感情性因子において著しい低下がみられた。

6. 喫煙の有無により喫煙に対する情緒的・表出的なイメージ(態度)には大きな違いが存在し、喫煙者ほど好意的・積極的イメージを持っていた。特に喫煙移行群では喫煙開始以前からイメージが好意的であり、喫煙に伴いそれは更に積極的なものとなった。

7. 娯楽や文化的活動における差異をみると、喫煙者ほど商業的・奢侈的活動への志向が強く、非喫煙者ほど文化的活動やスポーツへの志向が強い。

8. 喫煙に対する重要な他者の影響において、家族の影響は強いとはいえず、友人の影響が顕著である。しかしながら、禁煙の忠告の可能性(規範信念)においては家族のそれがやや強く、友人の場合は著しく弱い。

9. これらの結果を総合的にみるために重回帰分析により諸変数の相互の関係を検討した。その結果、喫煙行動に密接に関連する変数として喫煙に対するイメージ(態度)があげられ、次いで重要な他者の喫煙状況の関与が強く、この2変数によって喫煙行動のほとんどが説明された。

以上みてきたように、喫煙行動に対して重要な影響力あるいは規定力をもつ変数として、特に情緒的・感情的・表出的な成分を中心とする喫煙に対するイメージ(態度)および信念や、友人を中心とする重要な他者などが重視されるべきことが明らかにされたことは、従来の喫煙防止教育、つまり規範的あるいは認知的側面を中心とした考え方に対して、若干の再考を促すものとなるものであるとともに、健康問題に関する社会科学的アプローチの今後の必要性和可能性を示唆するものであるといえよう。

## 文 献

- 1) アイゼンク, H. J.: 喫煙習慣の継続と性格, ダン, W. L., たばこ総合研究センター訳: 喫煙行動, 人間の科学社, 1975, 149—197.
- 2) Fishbein, M. and Ajzen, I.: Belief, attitude, intention and behavior: An introduction to theory and research, Addison-Wesley: Reading, Mass., 1975.
- 3) Foss, R.: Personality, social influence and cigarette smoking, *14*(3): 279—286, 1973.
- 4) 福田勝洋, 三宅浩次: 喫煙防止教育の試みと評価(その1), *公衆衛生*, *40*(4): 48—52, 1976.
- 5) 福田勝洋, 三宅浩次: 喫煙防止教育の試みと評価(その2), *公衆衛生*, *40*(5): 39—42, 1976.
- 6) 福田勝洋, 三宅浩次: 喫煙防止教育の試みと評価(その3), *公衆衛生*, *41*(11): 49—53, 1977.
- 7) 後藤啓一: 喫煙の心理学, *公衆衛生*, *43*(11): 9—12, 1979.
- 8) マタラゾ, J. D.: 喫煙心理に関する前述の研究報告中のいくつかの共通点, ダン, W. L., たばこ総合研究センター訳: 喫煙行動, 人間の科学社, 1975, 287—293.
- 9) メイヤー, A.S.: 現行のシガレット論意によって生ずる喫煙動機上の葛藤, ダン, W.H., たばこ総合研究センター訳: 喫煙行動, 人間の科学社, 1975, 327—346.
- 10) Melttin, C.: Smoking as a behavior—Applying a social psychological theory, *Jor. of Health & Social Behavior*, *14*(2): 144—152, 1973.
- 11) 日本専売公社: 昭和53年全国タバコ喫煙者率調査, 1978.
- 12) Shapiro, D., Tursky, B., Schwartz, G.H. and Shnidman, S.R.: Smoking on cue—A behavioral approach to smoking reduction, *Jor. of Health & Social Behavior*, *12*(2): 108—113, 1971.
- 13) 渡辺 毅, 山添悦子, 加納克己, 浅井克晏: 一総合大学における学生の喫煙行動に関する調査, *公衆衛生*, *46*(8): 68—71, 1982.
- 14) 毎日新聞: タバコ全国世論調査, 1983年7月7日付.

付表1 調査時期別の調査内容

要因	変数	調査時期			要因	変数	調査時期		
		1回目	2回目	3回目			1回目	2回目	3回目
1 基 礎 的 要 因	1. 大学名	○	○	○	3 喫 煙 関 連 要 因	1. 喫煙の有無	○	○	○
	2. 性	○	○	○		2. 非喫煙の理由	○	○	○
	3. 学部	○	○	○		3. 喫煙者への意識	○	○	○
	4. 現役・浪人	○	/	/		4. 喫煙開始時期	○	/	/
	5. 出身地	○	/	/		5. 喫煙の動機	○	○	○
	6. 兄弟数	○	/	/		6. 喫煙量(本数)	○	○	○
	7. 出生順位	○	/	/		7. 喫煙の理由	○	○	○
	8. 父の最終学歴	○	/	/		8. 喫煙の有害意識	○	○	○
	9. 母の最終学歴	○	/	/		9. 喫煙の行動意図	○	○	○
	10. 家庭の職業	○	/	/		4. 重要な他者の喫煙 (6項目)	○	/	/
	11. 生活程度	○	/	/		5. 喫煙に対する信念 (15項目)	○	○	○
	12. サークル所属	/	○	○		6. 喫煙に対する態度 (7項目)	○	○	○
	13. 友人数	/	○	○		7. 喫煙に関する他者の期待 についての信念(8項目)	○	/	/
	14. 住居形態	/	○	○					
	15. アルバイト	/	○	○					
	16. 性格	○	/	/					
2 健 康 生 活 要 因	1. 大学入学目的	○	/	/					
	2. 労働・余暇観	○	/	/					
	3. 生活満足度	○	○	○					
	4. 健康状態	○	○	○					
	5. 健康意識	○	○	○					
	6. スポーツ実施度	○	○	○					
	7. 娯楽意識	○	○	○					

(注) ○…… 調査項目  
/…… 非調査項目

付表3 性格に関する因子行列(回転後)

因子	項目	F1	F2	F3	F4
適 応 性	積極性	.739			
	社交性	.713			
	明朗性	.602			
	行動性	.486			
	協調性	.397			
情 緒 性	神経質		.568		
	悲観性		.550		
	情緒安定性		.513		
活 動 性	指導性			.718	
	優越感			.682	
	勇気			.597	
	短気			.483	
意 志 性	意志力				.705
	責任感				.632
	集中力				.612
	適応性				.389
固 有 値	固有値	3.457	1.395	0.803	0.694
	全分散寄与率(%)	24.9	12.4	8.5	7.7
	累積分散寄与率(%)	24.9	37.2	45.7	53.4

付表4 性格と喫煙行動の関連

因子		適応性	情緒性	活動性	意志性	性全 格体
		喫煙行動	喫煙継続群	8.79	8.59	7.88
	喫煙移行群	8.53	7.54	7.88	8.38	32.35
	非喫煙群	8.26	7.81	7.83	8.67	32.57
F 値		1.99	2.30	0.79	0.66	0.57
平均		8.50	7.87	7.84	8.53	32.85



付表2 喫煙行動と主要な基礎的・社会的変数の関連

調査時期 喫煙行動 変数		1 回 目 調 査																	
		出身地				家の職業				生活程度			入学目的				兄弟数		
		農山漁村	9万人以下	10〜29万人	30万人以上	専門管理職	事務職	販売・熟練	その他	中の上	中の中	中の下	専門知識	自己陶冶	就職	楽しむこと	1人っ子	2人	3人以上
喫煙	喫煙	48.3	20.0	18.3	13.3	30.0	11.7	43.3	15.0	15.0	70.0	15.0	48.3	3.3	33.3	15.0	15.0	56.7	28.3
煙	非喫煙	39.7	15.5	13.8	31.0	24.1	6.9	29.3	36.2	22.4	60.0	17.2	50.0	19.6	25.9	5.2	5.2	62.1	32.8
喫煙率		55.8	57.1	57.9	29.6	56.3	63.6	59.1	30.0	40.9	54.5	45.0	49.2	15.4	57.1	75.0	75.0	47.9	47.2

調査時期 喫煙行動 変数		2 回 目 調 査							3 回 目 調 査													
		アルバイト			スポーツ実施度				友人数				友人の喫煙状況				生活満足度		スポーツ実施度			
		定期的	時々	非実施	週3日以上	週1〜2日	月1〜2日	非実施	い	1〜2人	3〜4人	5人以上	ほ喫と煙んど者	喫が煙多煙者い	非が喫多煙者い	ほ非喫と煙んど者	満	不	週3日以上	週1〜2日	月1〜2日	非
喫煙	喫煙	10.0	18.3	71.7	28.3	21.7	33.3	16.7	1.7	1.7	23.3	73.3	78.3	5.0	16.7	46.7	53.3	15.0	18.3	43.3	23.3	
煙	非喫煙	19.0	6.9	70.7	22.4	27.6	36.2	13.8	3.4	6.9	22.4	67.2	67.2	12.1	20.7	65.5	34.5	25.9	29.3	27.6	17.2	
喫煙率		35.3	73.3	50.6	56.7	44.8	48.8	52.6	33.3	20.0	50.0	53.0	54.7	30.0	43.5	42.4	60.4	37.5	39.3	61.9	56.0	

(注) 喫煙行動は第3回目調査の喫煙状況である。

付表5 健康と喫煙行動の関連

		変数	健康状態				健康意識		
			非常に良い	かなり良い	どちらともいえない	やや悪い	非常に重要	かなり重要	どちらとも重要
調査時期	1回目	喫煙	11.7	46.7	35.0	6.7	40.0	55.0	5.0
		非喫煙	17.2	51.7	15.5	15.5	69.0	31.0	0
	2回目	喫煙	45.0		40.0	15.0	55.0	40.0	5.0
		非喫煙	55.2		37.9	6.9	65.5	34.5	0
	3回目	喫煙	41.7		43.4	15.0	43.3	53.3	3.3
		非喫煙	50.0		34.5	15.5	69.0	25.9	5.2
x <sup>2</sup>	1回目	10.07				12.24*			
	2回目	3.04				4.36			
	3回目	3.43				10.74*			
喫煙率	1回目	41.2	48.3	67.7	30.8	36.9	64.7	100.0	
	2回目	45.0		52.2	69.2	45.8	54.5	100.0	
	3回目	46.3		54.3	50.0	39.4	66.7	40.0	

\* P &lt; .05

付表6 喫煙に関する信念の因子行列（回転後）

	項目	F1	F2	F3
F1 感情性 因子	イライラした時、喫煙するとよい	.748		
	喫煙者を見ると不潔な感じがする	.719		
	気分転換に喫煙はよい	.667		
	喫煙者を見ると、暗い感じがする	.640		
	喫煙者を見ると、不快な感じがする	.630		
	退屈な時、喫煙するとよい	.626		
	喫煙は社会的交際に役立つ	.557		
	喫煙は、話し相手をゆったりさせる	.551		
	喫煙は、他人に迷惑をかける	.449		
F2 社会性	喫煙するとカッコイイと思われる		.848	
	喫煙すると大人になった気がする		.723	
	喫煙すると優越感を感じる		.715	
F3 身体性	喫煙すると、血圧が上がる			.683
	喫煙すると、持久力が低下する			.663
	喫煙すると、肺ガンになる			.615
固有値		5.183	1.807	1.025
全分散寄与率(%)		37.5	14.9	10.0
累積分散寄与率(%)		37.5	52.4	62.4

付表7 喫煙に関する信念の因子別比較

調査	因子 喫煙	感情性		社会性		身体性		全体	
		M	F	M	F	M	F	M	F
1 回目	喫煙継続群	5.35	10.11***	8.91	4.12***	8.71	2.78*	22.97	10.77***
	喫煙移行群	6.65		8.84		8.69		24.19	
	非喫煙群	7.48		10.07		8.81		26.36	
2 回目	喫煙継続群	5.47	13.92***	9.26	0.13	8.74	1.80	23.47	8.08***
	喫煙移行群	6.81		9.50		8.54		24.85	
	非喫煙群	7.81		9.50		9.45		26.76	
3 回目	喫煙継続群	5.15	17.02***	9.41	1.71	9.09	4.89***	23.65	22.11***
	喫煙移行群	5.88		9.08		8.62		23.58	
	非喫煙群	7.79		9.83		9.53		27.16	

\*\*\* P &lt; .01    \* P &lt; .05